

理事長挨拶 済生会理事長 炭谷茂

済生会理事長の炭谷でございます。本日は済生会生活困窮者問題シンポジウムにお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。もうすでに9回と重ねてまいりまして、このシンポジウムを設けた趣旨につきましては先ほど塩出病院長に詳しくご説明いただきましたので、私からは重複を避けたいと思っております。若干長めのご挨拶を兼ねまして、私自身の考えている現在の日本の生活困窮者問題について考え方を説明させていただきたいと思っております。

最近、私は生活困窮者、場合によっては貧困者と言ってもいいかもしれませんが、そういう問題に対する関心はやや薄いのではないかと。特に行政、また研究者の中ではこの問題に対する取り組みが薄い。特に大学などでは生活保護論を専門にしている大学の先生は大変少なくなっているのではないかと思います。

本当にそれでいいのかと思うと、それではよくないのです。少し貧困の問題について歴史的に考えてみたいと思っております。世界で貧困問題の研究は20世紀の少し前、19世紀の終わり、イギリスのブースから始まりました。というのは社会福祉を勉強された方はイロハの話ですが、ブース、そしてラウントリー、この2人によって貧困者問題が研究として、また実務の面で向上したわけですが、ブースは第1貧困ライン、第2貧困ラインという考え方を示しました。第1貧困ラインというのは、本当の究極的な貧困、第2貧困ラインはちょっと無駄遣いをする、酒を飲み過ぎる、ギャンブルをすると貧困に陥ってしまう。これを第2貧困ラインとしたわけですが、これは福祉を勉強するものにとってはイロハの話ですが、このような貧困研究を基にして世界の貧困の対策は進みました。

日本も生活保護法をつくって、戦後着々と貧困対策をやってきましたが、アメリカを中心にしても世界は貧困問題を見るとちょっと様子が違うな、新しい貧困が起こっているのではないかと指摘されたのは1970年代の頃です。その後、最近はどうなのかと見ると、私は日本では三つの大きな生活困窮者の流れがあってこの三つをしっかりとらえないと日本の貧困問題、生活困窮者問題はわからないと思っております。

第1は、貧困者の著しい急増です。現在の保護率はだいたい1.4%を超える位、平成7年に0.7%をボトムにして2倍以上になっています。これがもっとも広がっている。生活保護のキャッチアップ率、これを捕捉率と言いますが、だいたい4分の1程度ですから、4分の3が影に隠れている。そうすると1.4%の4倍の約6%は生活保護制度の方がい

らっしゃると考えないといけない。そしてこれはもっともっと増えるのではないかと思います。保護率はこれからどんどん上がっていきます。このようにこれからは日本の貧困者はヨーロッパ並みに 1.4%から 3%程度に行くのは普通の形態だろう、普通の状況だろうと思っています。これが第 1 です。

第 2 は、1990 年代から日本もそうですが、ヨーロッパを中心にして社会的な排除と貧困とが結びつき始めました。代表的なのは外国人に対する排除、またホームレス、障害者、失業者、このようなちょっと異質な人たちが社会から排除される。これが貧困問題と完全に密着してしまいました。このような新しい貧困の形態が現れてきました。今回取り上げていただく 8050 問題もその一環です。このような関係で生活困窮者問題は、社会的な排除と結びつき始めている。このような見地から生活困窮者、貧困問題をとらえないといけない。これが第 2 の分野です。

第 3 の分野、これは日本ではほとんどの人は言っていないですが、私は非常に重要だと思っているのが第 3 の分野です。これは非常に脆弱性の表れている世帯が大変多くなった。何かといえば、ちょっと病気になれば、ちょっと介護になれば、直ちに貧困に陥ってしまう。貧困の予備軍です。これは高齢者を中心にしています。つまり高齢者はかつかつの年金生活をしている。しかし資産の貯えもない。昔であれば家族や親族が助けてくれたが、そんなものはない。そこでちょっと病気になったり、介護を要するようになったら、直ちに貧困に陥ってしまう。このような層がたくさんいる。

高齢者は非常にわかりやすい。しかし高齢者だけではなくて、一人親家庭、いわば非正規雇用の人もちょうと病気をしたり障害に陥ってしまうと直ちに貧困に陥ってしまう。自分は大丈夫だなと思っていても病気になってしまうことがある。この予備軍は、日本では 6000 万人位ではないかと私は思っています。日本人の半分はそういう危機感を持っている。貯えがない、家族や親族の助けがない、そして肝心の社会保障制度はこのようなものについては対応しきれていないわけです。ちなみに第 2 の社会的排除と貧困が結びついていく層は、だいたい 3000 万人程度だろうと私は思っています。

このようにこれからの日本の生活困窮者問題は、第 1 の分野、第 2 の分野、第 3 の分野、このようなことでとらえないと、日本の貧困問題はわからないだろうと思います。

今日は 8050 問題、このような観点で皆さん方がしっかりと学ぶことは大変ありがたいと思っています。今日のシンポジウムがこれからの皆様方のお仕事や社会を見るうえで役に立つことがあれば大変幸いです。どうもありがとうございました。